

梶井基次郎

のんきな患者



のんきな患者

一

吉田は肺が悪い。寒かんになって少し寒い日が来たと思っ
たら、すぐその翌日から高い熱を出してひどい咳せきになっ
てしまった。胸の臓器を全部押上げて出してしまおうと
しているかのような咳をする。四五日経たつともうすつか
り瘦やせてしまった。咳もあまりしない。しかしこれは咳
が癒なおったのではなくて、咳をするための腹の筋肉がすつ

かり疲れ切ってしまったからで、彼等が咳をするのを肯^{がえ}んじなくなってしまうたかららしい。それにもう一つは心臓がひどく弱ってしまったて、一度咳をしてそれを乱してしまつと、それを再び鎮めるまでに非常に苦しい目を見なければならぬ。つまり咳をしなくなつたというのは、身体が衰弱してはじめてのときのような元気がなくなつてしまつたからで、それが証拠には今度はだんだん呼吸困難の度を増して浅薄な呼吸を数多くしなければならなくなつて来た。

病勢がこんなになるまでの間、吉田はこれを人並の流

行性感冒のように思つて、またしても「明朝はもう少しよくなっているかもしれない」と思つてはその期待に裏切られたり、今日こそは医者を頼もうかと思つてはむだに辛抱をしたり、何時いつまでもひどい息切れを冒しては便所へ通つたり、そんな本能的な受身なことばかりやつていた。そしてやつと医者を迎えた頃には、もうげっそり頬もこけてしまつて、身動きも出来なくなり、二三日のうちにははや褥瘡とこずれのようなものまでが出来かかつて来るという弱り方であつた。或る日はしきりに「こうつと」「こうつと」というようなことを殆ど一日云つている。

かと思うと「不安や」「不安や」と弱々しい声を出して訴えることもある。そういうときはきまって夜で、どこから来るともしれない不安が吉田の弱り切った神経を堪たまらなくするのであった。

吉田はこれまで一度もそんな経験をしたことがなかった。たので、そんなときは第一にその不安の原因に思い悩むのだった。一体ひどく心臓でも弱って来たんだろうか、それともこんな病気にはあり勝ちな、不安ほどにはないなにかの現象なんだろうか、それとも自分の過敏になつた神経がなにかの苦痛をそういう風に感じさせるんだろ

うか。——吉田は殆ど身動きも出来ない姿勢で身体からだを
鯨硬張しやちこばらせたまま辛ろうじて胸へ呼吸を送っていた。
そして今若もし突如この平衡を破るものが現われたら自分
はどうなるかshれないということを思っていた。だから
吉田の頭には地震とか火事とか一生に一度遭あうか二度遭
うかというようなものまでが真剣に写っているのだっ
た。また吉田がこの状態を続けてゆくと云うのには絶え
ない努力感の緊張が必要であって、もしその綱渡りのよ
うな努力になにか不安の影が射せばたちどころに吉田は
深い苦痛に陥らざるを得ないのだった。——しかしそん

なことはいくら考えても決定的な知識のない吉田にはその解決がつかはずはなかつた。その原因を臆測するにもまたその正否を判断するにも結局当の自分の不安の感じに由る外はないのだとすると、結局それは何をやっていいのか訳のわからないことになるのは当然のことなのだ。したが、しかしそんな状態にいる吉田にはそんな諦めあきらがつくはずはなく、いくらでもそれは苦痛を増して行くことになるのだった。

第二に吉田を苦しめるのはこの不安には手段があると
思うことだつた。それは人に医者へ行つて貰うことと誰

かに寝ずの番についていて貰うことだった。しかし吉田は誰もみな一日の仕事をすましてそろそろ寝ようとする今頃になって、半里はんみちもある田舎道を医者へ行って来てくれとか、六十も越してしまった母親に寝ずについてくれとか云うことは云い出し憎かった。またそれを思い切って頼む段になると、吉田は今のこの自分の状態をどうしてわかりの悪い母親にわからしていいか、——それよりも自分が辛うじてそれを云うことが出来ても、じつくりとした母親の平常の態度でそれを考えられたり、またその使いを頼まれた人間がその使いを行き渋ったりす

るときのことを考えると、実際それは吉田にとって泰山を動かすような空想になってしまふのだった。しかし何故不安になって来るか——もう一つ精密に云うと——何故不安が不安になって来るかというと、これからだんだん人が寝てしまつて医者へ行つて貰うということも本当に出来なくなるということや、そして母親も寝てしまつてあとはただ自分一人が荒涼とした夜の時間のなかへ取残されるといふことや、そして若しその時間の真中でこのえたいの知れない不安の内容が実現するようなことがあればもはや自分はどうすることも出来ないではないか

というようなことを考えるからで——だからこれは目を
つぶって「辛抱するか、頼むか」ということを決める以
外それ自身のなかには何等解決の手段も含んでいない事
柄なのであるが、たとえ吉田は漠然とそれを感じること
が出来ても、身体も心も抜差しめいもうのならない自分の状態
であつてみればなおのことその迷妄めいもうを捨て切つてしまふこ
とも出来ず、その結果はあがきのとれない苦痛がますます
増大してゆく一方となり、そのはてにはもうその苦し
さだけでも堪え切れなくなつて「こんなに苦しむ位なら
一そのこと云つてしまおう」と最後の決心をするように

なるのだが、そのときはもう何故か手も足も出なくなつたような感じで、その傍そばに坐っている自分の母親がいかに歯痒はがゆいのんきな存在に見え、「此処と其処だのに何故これを相手にわからすことが出来ないのだらう」と胸のなかの苦痛をそのまま掴つかみ出して相手に叩きつけたいような癩癩かんしゃくが吉田には起つて来るのだった。

しかし結局はそれも「不安や」「不安や」という弱々しい未練一杯の訴えとなつて終つてしまふほかないので、それも考えてみれば未練とは云つてもやはり夜中なにか起つたときには相手をはつと気づかせることの役にな

は立つという切羽せっぱつまつた下心もはいつているにはちが
いなく、そうすることによつてやつと自分一人が寐ねられ
ないで取残される夜の退引のっぴきならない辛抱をすることに
なるのだった。

吉田は何度「己が気持よく寐られさえすれば」と思つ
たことかしのれなかつた。こんな不安も吉田がその夜を睡
むる当てさえあれば何の苦痛でもないのので、苦しいのは
ただ自分が昼にも夜にも睡眠ということ勘定に入れる
ことが出来ないということだった。吉田は胸のなかかど
うにかして和やわらんで来るまでは否いやでも応でもいつも身体

を鯪^{しやちこ}硬張^{こば}らして夜昼を押し通していなければならなかった。そして睡眠は時^{しぐれ}雨空の薄日のように、その上を時々やって来ては消えてゆく殆ど自分とは没交渉なものだった。吉田はいくら一日の看護に疲れても寝るときが来ればいつでもすやすやと寐て行く母親がいかにも楽そうにもまた薄情にも見え、しかし結局これが己の今やらなければならぬことなんだと思ひ諦めてまたその努力を続けてゆく外なかった。

そんなある晩のことだった。吉田の病室へ突然猫が這^{はい}入^いって来た。その猫は平常吉田の寢床へ這入^{はい}って寝る

という習慣があるので吉田がこんなになってからは喧まやかしく云って病室へは入れない工夫をしていたのであるが、その猫がどこから這入って来たのか不意にニヤアと
いういつもの鳴声とともに部屋へ這入って来たときには
吉田は一時に不安と憤懣ふんまんの念に襲われざるを得なかつ
た。吉田は隣室に寝ている母親を呼ぶことを考えたが、
母親はやはり流行性感冒のようなものにかかって二三日
前から寝ているのだった。そのことについては吉田は自
分のことも考え、また母親のことも考えて看護婦を呼ぶ
ことを提議したのだったが、母親は「自分さえ辛抱すれ

ばやって行ける」という吉田にとっては非常に苦痛な考えを固執していてそれを取上げなかった。そしてこんな場合になつては吉田はやはり一匹の猫位でその母親を起すということは出来難い気がするのだつた。吉田はまた猫のことには「こんなことがあるかもしれないと思つてあんなにも神経質に云つてあるのに」と思つて自分が神経質になることによつて払つた苦痛の犠牲が手^て応^ごえもな^たくすつぽかされてしまったことに憤懣を感じないではいられなかつた。しかし今自分は癩癩を立てることによつて少しの得もすることは無いと思つたと、その訳のわから

ない猫をあまり身動きも出来ない状態で立ち去らせること
の如何いかにまた根氣ねきのいる仕事であるかを思わざるを得
なかつた。

猫は吉田の枕のところへやって来るといつものように
夜着えりもとの襟元えりもとから寢床ねどのなかへもぐり込もうとした。吉田
は猫の鼻が冷たくてその毛皮が戸外の霜で濡れているの
をその頬で感じた。即ち吉田は首を動かしてその夜着の
隙間ひまを塞ふさいだ。すると猫は大胆にも枕の上へあがって来
てまた別の隙間ひまへ遮しや二無にむ二首にを突込もうとした。吉田は
そろそろあげて来てあつた片手でその鼻先を押しかえし

た。このようにして懲罰ということ以外に何もしらない動物を、極度に感情を押し殺した僅かの身体の運動で立ち去らせるということは、訳のわからないその相手を殆ど懷疑に陥れることによつて諦めさすというような切羽つまつた方法を意味していた。しかしそれがやつとのことで成功したと思うと、方向を変えた猫は今度はのそのと吉田の寢床の上へあがつてそこで丸くなって毛を舐なめはじめた。そこへ行けばもう吉田にはどうすることも出来ない場所である。薄氷を踏むような吉田の呼吸が遽にわかにずいりと重くなつた。吉田はいよいよ母親を起そう

かどうしようかということでは抑えていた癩癩を昂たかぶらせはじめた。吉田にとってはそれを辛抱することは出来ないことかも知れなかった。しかしその辛抱をしてい
る間はたとえ寝たか寝ないかわからないような睡眠ではあつたが、その可能性が全然なくなつてしまふことを考
えなければならなかった。そしてそれを何時まで持ち耐こた
えなければならぬかということは全く猫次第であり、
何時起きるかしれない母親次第だと思つたと、どうしても
そんな馬鹿馬鹿しい辛抱は仕切れない気がするのだつ
た。しかし母親を起すことを考えると、こんな感情を抑

えて恐らく何度も呼ばなければならぬだろうという気持だけでも吉田は全く大儀な気になつてしまふのだつた。——暫らくして吉田はこの間から自分で起したことのなかつた身体をじりじり起しはじめた。そして床の上へやつと起きかえつたかと思つたと、寢床の上に丸くなつて寝ている猫をむんずと掴まえた。吉田の身体はそれだけの運動でもう浪のように不安が揺れはじめた。しかし吉田はもうどうすることも出来ないで、いきなりそれをその這入^{はい}つて来た部屋の隅へ「二度と手間のかからないように」叩きつけた。そして自分は寢床の上であぐ

らをかいてそのあとの恐ろしい呼吸困難に身を委まかせたの
だった。

二

しかし吉田のそんな苦しみもだんだん耐え難いような
ものではなくなって来た。吉田は自分にやっと睡眠らし
い睡眠が出来るようになり、「今度はだいぶんひどい目
に会った」ということを思うことが出来るようになって、
やっと苦しかった二週間ほどのことが頭へのぼって来

た。それは思想もなにもないただ荒々しい岩石の重ちようじよう 畳じよう する風景だった。しかしそのなかでも最もひどかった咳の苦しみの最中に、いつも自分の頭へ浮かんで来る訳のわからない言葉があったことを吉田は思い出した。それは「ヒルカニヤの虎」という言葉だった。それは咳の喉のど を鳴らす音ともれんかん 聯関があり、それを吉田が観念するのは「俺はヒルカニヤの虎だぞ」というようなことを念じるからなのだったが、一体その「ヒルカニヤの虎」というものがどんなものであったか吉田はいつも咳のすんだあとと妙な気持がするのだった。吉田は何かきつとそれは自

分の寐ねつく前に読んだ小説かなにかのなかにあつたことにちがいないと思うのだった。それが思い出せなかつた。また吉田は「自己の残像」というようなものがあるものなんだなというようにことを思ったりした。それは吉田がもうすっかり咳をするのに疲れてしまつて頭を枕へ凭もたらせていると、それでもやはり小さい咳が出て来る、しかし吉田はもうそんなものに一々頸くびを固くして応じてはいられないと思つてそれを出るままにさせておくと、どうしてもやはり頭はそのたびに動かざるを得ない。するとその「自己の残像」というものがいくつも出来るの

である。

しかしそんなこともみな苦しかった二週間ほどの間の思い出であった。同じ寐られない晩にしても吉田の心にはもうなにかの快楽を求めするような気持の感じられるような晩もあつた。

或る晩は吉田は煙草を眺めていた。床の脇にある火鉢の裾に刻煙草きざみたばこの袋と煙管きせるとが見えている。それは見えているといふよりも、吉田が無理をして見ているので、それを見ているということが何とも云えない楽しい気持を自分に起させていることを吉田は感じていた。そして吉

田の寐られないのはその気持のためで、云わばそれは
稍ややとやや楽しすぎる気持なのだった。そして吉田は自分の頬
がそのために少しずつ火照ほてったようになって来ていると
いうことさえ知っていた。しかし吉田は決してほかを向
いて寝ようという気はしなかった。そうすると折角自分
の感じている春の夜のような気持が一時に病氣病氣した
冬のような気持になってしまうのだった。しかし寐られ
ないということも吉田にとっては苦痛であった。吉田は
何時か不眠症ということについて、その原因は結局患
者が眠ることを欲しないのだという学説があることを人

に聞かされていた。吉田はその話を聞いてから自分の睡むれないときには何か自分に睡むるのを欲しない気持がありはしないかと思つて一夜それを検査してみるのだが、今自分が寐られないということについては検査してみるまでもなく吉田にはそれがわかつていた。しかし自分がその隠れた欲望を実行に移すかどうかという段になると吉田は一も二もなく否定せざるを得ないのだつた。煙草を喫^すうも喫わないも、その道具の手の届くところへ行きつくだけでも、自分の今のこの春の夜のような気持は一時に吹き消されてしまわなければならぬとい

うことは吉田も知っていた。そして若しそれを一服喫つたとする場合、この何日間か知らなかったどんな恐ろしい咳の苦しみが襲って来るかということも吉田は大概察していた。そして何よりもまず、少し自分がその人の故^{せい}で苦しい目をしたというような場合直ぐに癩癩を立てておこりつける母親の寐ている隙に、それもその人の忘れて行つた煙草を——と思うとやはり吉田は一も二もなくその欲望を否定せざるを得なかつた。だから吉田は決してその欲望をあらわには意識しようとは思わない。そしていつまでもその方を眺めては寐られない春の夜のよう

な心のと きめきを感じているのだった。

或る日は吉田はまた鏡を持って来させてそれに枯れ枯れとした真冬の庭の風景を反射させては眺めたりした。

そんな吉田にはいつも南天の赤い実が眼の覚めるような刺戟しげきで眼についた。また鏡で反射させた風景へ望遠鏡を持って行って、望遠鏡の効果があるものかどうかということ、吉田はだいぶんながい間寢床のなかで考えたりした。大丈夫だと吉田は思ったので、望遠鏡を持って来させて鏡を重ねて覗のぞいて見るとやはり大丈夫だった。

或る日は庭の隅に接した村の大きな櫟くぬぎの木へたくさ

ん渡り鳥がやって来ている声がした。

「あれは一体何やろ」

吉田の母親はそれを見つけて硝子障子のところへ出て行きながら、そんな独り言のような吉田に聞かすようなことを云うのだった。瘰癧を起すのに慣れ続けた吉田は、「勝手にしろ」というような気持でわざと黙り続けているのだった。しかし吉田がそう思って黙っていると、いうのは吉田にしてみればいい方で、若しこれが気持のよくないときだったら自分のその沈黙が苦しくなっていて、（一体そんなことを聞くような聞かないようなことを云

って自分がそれを眺めることが出来ると思っ
ているのか）というようなことから始まって、
母親が自分のそんな意志を否定すれば、
（いくらそんなことを云ってもぼんやり
自分がそう思っただけの話で、いつもそん
なぼんやりしたことには自分が気がつか
ないだけの話で、いつもそんなぼんやり
したことを云ったりしたりするから無理に
でも自分が鏡と望遠鏡とを持ってそれを
眺めなければならぬような義務を感じ
たりして苦しくなるのじゃないか）とい
う風に母親を攻めたてて行くのだった
が、吉田は自分の気持がそういう朝でさ
っぱりしているので、黙ってその声をき
いている

ことが出来るのだった。すると母親は吉田がそんなことを考えているということには気がつかずにまたこんなことを云うのだった。

「なんやらヒヨヒヨした鳥やわ」

「そんなら鶇ひよですやろうかい」

吉田は母親がそれを鶇ひよに極めたがってそんな形容詞を使うのだということが大抵わかるような気がするのでそんな返事をしたのだったが、しばらくすると母親はまた吉田がそんなことを思っているとは気がつかずに、

「なんやら毛がムクムクしているわ」

吉田はもう癩癩を起こすよりも母親の思っていることがいかにも滑稽になって来たので、

「そんなら椋鳥むくですやろうかい」

と云って独りで笑いたくなくなって来るのだった。

そんな或る日吉田は大阪でラジオ屋の店を開いている末の弟の見舞をうけた。

その弟のいる家というのはその何か月か前まで吉田や吉田の母や弟やの一緒に住んでいた家であつた。そしてそれはその五六年も前吉田の父がその学校へ行かない吉田の末の弟に何か手に合つた商売をさせるために、そし

て自分達もその息子を仕上げながら老後の生活をしていくために買った小間物店で、吉田の弟はその店の半分を自分の商売にするつもりでラジオ屋に造り変え、小間物屋の方は吉田の母親が見ながらずっと暮して来たのであった。それは大阪の市が南へ南へ伸びて行くこうとして十何年か前までは草深い田舎であった土地をどんどん住宅や学校、病院などの地帯にしてしまい、その間へはまた多くはそこの地元の百姓であった地主たちの建てた小さな長屋がたくさん出来て、野原の名残りが年毎にその影を消して行きつつあるという風の町なのであった。吉田

の弟の店のあるところはその間でも比較的早くから出来ていた通筋で両側はそんな町らしい、いろんなものを商う店が立ち並んでいた。

吉田は東京から病気が悪くなつてその家へ歸つて来たのが二年あまり前であつた。吉田の歸つて来た翌年吉田の父はその家で死んで、しばらくして吉田の弟も兵隊に行つていたのでから歸つて来ていよいよ落着いて商売をやつて行くことになり嫁を貰つた。そしてそれを機会に、先ず吉田も吉田の母も弟も、それまで外で家を持つていた吉田の兄の家の世話になることになり、その兄がそれ

まで住んでいた町から少し離れた田舎いなかに、病人を住ますに都合のいい離家はなれのあるいい家が見つかったのでそこへ引越したのがまだ三カ月ほど前であった。

吉田の弟は病室で母親を相手に暫らく当り触りさわのない自分の家の話などをしていたがやがて帰って行った。しばらくしてそれを送って行った母が部屋へ帰って来て、また暫らくしてのあとで、母は突然、

「あの金物屋の娘が死んだと」
と云って吉田に話しかけた。

「ふうむ」

吉田はそう云ったなり弟がその話をこの部屋ではしないで送って行った母と母屋おもやの方でしたということを考えていたが、やはり弟の眼にはこの自分がそんな話も出来ない病人に見えたかと思うと、「そうかなあ」という風にも考えて、

「何であれもそんな話を彼方あっちの部屋でしたりするんですやろなあ」

という風なことを云っていたが、

「そりやお前がびっくりすると思うてさ」

そう云いながら母は自分がそれを云ったことは別に意

に介してないらしいので吉田は直ぐにも「それじゃあんたは？」と聞きかえしたくなるのだったが、今はそんなことを云う気にもならず吉田はじつとその娘の死んだと
いうことを考えていた。

吉田は以前からその娘が肺が悪くて寝ているということは聞いて知っていた。その荒物屋というのは吉田の弟の家から辻つじを一つ越した二三軒先のくすんだ感じの店だった。吉田はその店にそんな娘が坐っていたことはいくら云われても思い出せなかったが、その家のお婆さんというのはいつも近所へ出歩いているのでよく見て知って

いた。吉田はそのお婆ばあさんからはいつも少し人の好過ぎる稍と腹立たしい印象をうけていたのであるが、それはそのお婆さんがまたしても変な笑い顔をしながら近所のおかみさんたちとお喋しゃべりをしに出て行つては、弄なぶりものにされている——そんな場面をたびたび見たからだつた。しかしそれは吉田の思い過ぎで、それはそのお婆さんが聾つんぼで人に手真似をして貰わないと話が通じず、しかも自分は鼻のつぶれた声で物を云うので一層人に軽蔑けいべつ的な印象を与えるからで、それは多少人々には軽蔑されてはいても、面白半分にでも手真似で話してくれる人が

あり、鼻のつぶれた声でもその話を聞いてくれる人があってこそ、そのお婆さんも何の気兼ねもなしに近所仲間の仲間入りが出来るので、それが飾りもなにもないこうした町の生活の真実なんだということはいろいろなことを知って見てはじめて吉田にも会得のゆくことなのだっ
た。

そんな風ではじめ吉田にはその娘のことよりもお婆さんのことがその荒物屋についての知識を占めていたのであるが、だんだんその娘のことが自分のことにも関聯して注意されて来たのはだいぶんその娘の容態も悪くなっ

て来てからであった。近所の人の話ではその荒物屋の親爺さんおやじというのが非常に吝嗇けちで、その娘を医者にもかけてやらなければ薬も買ってやらないということであった。そしてただその娘の母親であるさっきのお婆さんだけがその娘の世話をしている、娘は二階の一と間に寝たきり、その親爺さんも息子もそしてまだ来て間のないその息子の嫁も誰もその病人には寄りつかないようにしているということを云っていた。そして吉田はあるときその娘が毎日の食後に目高を五匹宛の嘸のんでいるという話をきいたときは「どうしてまたそんなものを」という気持が

してにわかにはその娘を心にとめるようになってしまったのだが、しかしそれは吉田にとってまだまだ遠い他人事ひとごとの気持なのであった。

ところがその後しばらくしてその嫁が吉田の家へ掛取りに来たとき、家の者と話をしてるのを吉田がこちらの部屋のなかで聞いていると、その目高を嚙むようになってから病人が工合がいいと云っているということや、親爺さんが十日に一度位それを野原の方へ取りに行くという話などをしてから最後に、

「うちの網はいつでも空あいてますよって、お家の病人さ

んにもちっと取って来て飲ましてあげはったらどうで
す」

というような話になって来たので吉田は一時に狼狽ろうばいしてしまった。吉田は何よりも自分の病気がそんなにも大
っぴらに話されるほど人々に知られているのかと思うと
今更のように驚ろかないではいられないのだった。し
かし考えてみれば勿論それは無理のない話で、今更それ
に驚ろくというのはやはり自分が平常自分について虫の
いい想像をしているんだということ。吉田は思い知らな
ければならなかったのだ。だが吉田にとってまだ

生々しかつたのはその目高を自分にも飲ましたらと云われたことだった。あとでそれを家の者が笑って話したとき、吉田は家の者にもやはりそんな気があるのじやないかと思つて、もうちよつとその魚を大きくしてやる必要があると云つて悪にくまれ口を叩いたのだが、吉田はそんなものを飲みながらだんだん死期に近づいてゆく娘のことを想像すると堪らないような憂鬱な気持になるのだった。そしてその娘のことについてはそれきりで吉田はこちらの田舎の住居の方へ来てしまったのだったが、それからしばらくして吉田の母が弟の家へ行つて来たときの

話に、吉田は突然その娘の母親が死んでしまったことを聞いた。それはそのお婆さんが或る日あが上りかまち框から座敷の長火鉢の方へあがって行きかけたまま脳溢血のういつけつかなにかで死んでしまったというので非常にあっけない話であったが、吉田の母親はあのお婆さんに死なれてはあの娘も一遍に気を落としてしまったらうとそのことばかりを心配した。そしてそのお婆さんが平常あんなに見えていても、その娘を親爺さんには内証で市民病院へ連れて行ったり、また娘が寝たきりになってからはひそか窃に薬を貰いに行つてやつたりしたことがあるということ、ある

ときそのお婆さんが愚痴話に吉田の母親をつかまえて話したことがあると云って、やはり母親は母親だということとを云うのだった。吉田はその話には非常にしみじみとしたものを感じて平常のお婆さんに対する考えもすっかり変ってしまったのであるが、吉田の母親はまた近所の人のお話だと云って、そのお婆さんの死んだあとは例の親爺さんがお婆さんに代って娘の面倒をみてやっていること、それがどんな工合にいつているのか知らないが、その親爺さんが近所へ来ての話に「死んだ婆さんは何一つ役に立たん婆さんやったが、ようまああの二階のあがり

下りを一日に三十何遍もやったもんやと思つてそれだけは感心する」と云つていたということを吉田に話して聞かせたのだった。

そしてそこまでが吉田が最近までに聞いていた娘の消息だったのだが、吉田はそんなことをみな思い出しながら、その娘の死んで行つた淋しい気持などを思い遣つてやいるうちに、不知不識しらずしらずの間にすっかり自分の気持が便りない変な気持になつてしまつていてのを感じた。吉田は自分が明るい病室のなかにい、そこには自分の母親もいながら、何故か自分だけが深いところへ落ち込んでしま

って、そこへは出て行かれないような気持になってしまった。

「やはり吃驚びっくりしました」

それからしばらく経って吉田はやっと母親にそう云ったのであるが母親は、

「そうやろがな」

却かえって吉田にそれを納得さすような口調でそう云ったなり、別に自分がそれを云ったことについては何も感じないらしく、またいろいろその娘の話をしながら最後に、

「あの娘はやっぱりあのお婆さんが生きていてやらん

ことには、——あのお婆さんが死んでからまだ二た月に
もならんでなあ」と嘆じて見せるのだった。

三

吉田はその娘の話からいろいろなことを思い出していた。第一に吉田が気付くのは吉田がその町からこちらの田舎へ来てまだ何カ月にもならないのに、その間に受けとったその町の人の誰かの死んだという便りの多いことだった。吉田の母は月に一度か二度そこへ行って来る度

に必ずそんな話を持って帰った。そしてそれは大抵肺病で死んだ人の話なのだ。そしてその話をきいているとそれらの人達の病気にかかって死んで行つたまでの期間は非常に短かかった。ある学校の先生の娘は半年ほどの間に死んでしまつて今はまたその息子が寝ついてしまつていた。通筋の毛糸雑貨屋の主人はこの間まで店へ据えた毛糸の織機で一日中毛糸を織っていたが、急に死んでしまつて、家族が直ぐ店を畳んで国へ歸つてしまつた。そのあとは直きカフエーになつてしまつた。――

そして吉田は自分は今はこんな田舎にいてたまにそん

なことをきくから、いかにもそれを顕著に感ずるが、自分がいいた二年間という間もやはりそれと同じように、そんな話が実に数知れず起っては消えていたんだということをおぼわざるを得ないのだった。

吉田は二年ほど前病気が悪くなって東京の学生生活の延長からその町へ帰って来たのであるが、吉田にとってそれは殆どはじめての意識して世間というものを見る生活だった。しかしそうはいっても吉田は、いつも家の中に引込んでいて、そんな知識というものは大抵家の者の口を通じて吉田にはいつて来るのだったが、吉田はさ

つきの荒物屋の娘の目高のように自分にすすめられた肺病の薬というものを通じて見ても、そういう世間がこの病氣と戦っている戦の暗黒さを知ることが出来るのだった。

最初それはまだ吉田が学生だった頃、この家へ休暇に帰って来たときのことだった。帰って来てそうそう匆々吉田は自分の母親から人間の脳味噌の黒焼を飲んでみないかと云われて非常に嫌いやな気持ちになったことがあった。吉田は母親がそれをおずおずでもない一種変な口調で云い出したとき、一体それが本気なのかどうなのか、何度も母親の

顔を見返すほど妙な気持になった。それは吉田が自分の母親がこれまで滅多にそんなことを云う人間ではなかったことを信じていたからで、その母親が今そんなことを云い出しているかと思うと何となく妙な頼りないような気持になって来るのだった。そして母親がそれをすすめた人間から既に少しばかりそれを貰って持っているのだということを知ったとき吉田は全く嫌な気持になってしまった。

母親の話によるとそれは青物を売りに来る女があつて、その女といろいろ話をしているうちにその肺病の特

効薬の話その女がはじめたというのだった。その女には肺病の弟があつてそれが死んでしまった。そしてそれを村の焼場で焼いたとき、寺の和尚おしやうさんがついていて、「人間の脳味噌の黒焼はこの病気の薬だから、あなたも人助けだからこの黒焼を持っていて、もしこの病気で悪い人に会ったら頒わけてあげなさい」

そう云つて自分でそれを取り出してくれたというのであった。吉田はその話のなかから、もう何の手当も出来ずに死んでしまったその女の弟、それを葬ろうとして焼場に立っている姉、そして和尚と云つても何だか頼りない

男がそんなことを云って焼け残った骨をつついてい
る焼場の情景を思い浮かべることが出来るのだ
たが、その女がその言葉を信じてほかのもの
ではない自分の弟の脳味噌の黒焼をいつま
でも身近に持っていて、そしてそれをこの
病気で悪い人に会えばくれてやろうとい
う気持ちには、何かしら堪え難いものを
吉田は感じないではないのだ。そして
そんなものを貰ってしまった、大抵自分が
嘔まないのはわかっているのに、その
あとを一体どうする積りなんだと、吉田は
母親のしたことが取返しつかないやな
ことに思われるのだたが、傍にき

いていた吉田の末の弟も、

「お母さん、もう今度からそんなこと云うのん嫌でっせ」

と云ったので何だか事件が滑稽になって来て、それはそのままに梟けりがついてしまったのだった。

この町へ帰って来てしばらくしてから吉田はまた首縊くびくりの縄を「まあ馬鹿なことやと思つて」嘸やまとんでみないかと云われた。それをすすめた人間は大和やまとで塗師ぬしやをしてい
る男でその縄をどうして手に入れたかという話を吉田に
して聞かせた。

それはその町に一人の鰥夫やもめの肺病患者があつて、その男は病気が重おもつたまま殆ど手当をする人もなく、一軒の荒あばら家に捨て置かれてあつたのであるが、とうとう最近になつて首を縊つて死んでしまつた。するとそんな男にでもいろんな借金があつて、死んだとなるといろんな債権者がやつて来たのであるが、その男に家を貸していた大家がそんな人間を集めてその場でその男の持っていたものを競売にして後仕末をつけることになつた。ところがその品物のなかで最も高い値が出たのはその男が首を縊つた縄で、それが一寸二寸という風にして買い手がつ

いて、大家はその金でその男の簡単な葬式をしてやったばかりでなく自分のところの滞っていた家賃もみな取つてしまったという話であった。

吉田はそんな話を聞くにつけても、そういう迷信を信じる人間の無智に馬鹿馬鹿しさを感じない訳に行かなかつたけれども、考えてみれば人間の無智というのはみな程度の差で、そう思って馬鹿馬鹿しさの感じを取除いてしまえば、あとに残るのはそれらの人間の感じている肺病に対する手段の絶望と、病人達の何としてでも自分のよくなりつつあるという暗示を得たいという二つの事柄

なのであった。

また吉田はその前の年母親が重い病気にかかって入院したとき一緒にその病院へついて行っていたことがあった。そのとき吉田がその病舎の食堂で、何心なく食事した後ぼんやりと窓に映る風景を眺めていると、いきなりその眼の前へ顔を近付けて、非常に押殺した力強い声で、

「心臓へ来ましたか？」

と耳打ちをした女があった。はっとして吉田がその女の顔を見ると、それはその病舎の患者の附添いに雇われている附添婦の一人で、勿論そんな附添婦の顔触にも毎

日のように変化はあったが、その女はその頃露悪的な冗談を云っては食堂へ集まって来る他の附添婦たちを牛耳ぎゆうじっていた中婆さんなのだった。

吉田はそう云われて何のことかわからずにしばらく相手の顔を見ていたが、直ぐに「ああ成程」と気のついたことがあった。それは自分がその庭の方を眺めはじめた前に、自分が咳をしたということなのだった。そしてその女は自分が咳をしてから庭の方を向いたのを勘違いして、てっきりこれは「心臓へ来た」と思ってしまったのだと吉田は悟ることが出来た。そして咳が不意に心臓の

動悸どうきを高めることがあるのは吉田も自分の経験で知っていた。それで納得の行った吉田ははじめてそうではない旨を返事すると、その女はその返事には委細かまわずに、

「その病気に利くええ薬を教えただげまひよか」

と、また脅おどかすように力強い声でじつと吉田の顔を覗のぞき込んだのだった。吉田は一にも二にも自分が「その病気」に見込まれているのが不愉快ではあったが、

「一体どんな薬です？」

と素直に聞き返してみることにした。するとその女はまたこんなことを云って吉田を閉口させてしまうのだっ

た。

「それは今此処で教えてもこの病院では出来まへんで」
そしてそんな物々しい駄目をおしながらその女の話し
た薬というのは、素焼の土瓶どびんへ鼠の仔を捕って来て入れ
てそれを黒焼にしたもので、それをいくらかずつか極く
少ない分量を飲んでいると、「一匹食わんうちに」癒なおる
というのであった。そしてその「一匹食わんうちに」と
いう表現でまたその婆さんは可怕こわい顔をして吉田を睨にらん
で見せるのだった。吉田はそれですっかりその婆さんに
牛耳られてしまったのであるが、その女の自分の咳に敏

感であつたことや、そんな薬のことなどを思い合せてみると、吉田はその女は附添婦という商売柄ではあるが、きつとその女の近い肉親にその病氣のものを持っていたのにちがいないということ想像することが出来るのであつた。そして吉田が病院へ来て以来最もしみじみした印象をうけていたものはこの附添婦という寂しい女達の群のことであつて、それらの人達はみな単なる生活の必要というだけではなしに、夫に死別れたとか年が寄つて養い手がないとか、どこかにそうした人生の不幸を烙印らくいんされている人達であることを吉田は観察していたのであ

るが、あるいはこの女もそうした肉親をその病気で、なくすることによって、今こんなにして附添婦などをやっているのではあるまいかということを、吉田はそのときふと感じたのだった。

吉田は病気のためにたまにこうした機会にしか直接世間に触れることがなかったのであるが、そしてその触れた世間というのはみな吉田が肺病患者だということを見破って近付いて来た世間なのであるが、病院にいる一月ほどの間にまた別なことに打つかった。

それは或る日吉田が病院の近くの市場へ病人の買物に

出かけたときのことだった。吉田がその市場で用事を足して帰って来ると往来に一人の女が立っていて、その女がまじまじと吉田の顔を見ながら近付いて来て、

「もしもし、あなた失礼ですが……」

と吉田に呼びかけたのだった。吉田は何事かと思つて、「？」

とその女を見返したのであるが、そのとき吉田の感じていたことは多分この女は人違いでもしているのだろうということ、そういう往来のよくある出来事が大抵好意的な印象で物分かれになるように、このときも吉田は

どちらかと云えば好意的な気持を用意しながらその女の云うことを待ったのだった。

「ひよっとしてあなたは肺がお悪いのじやありませんか」

いきなりそう云われたときには吉田は少なからず驚いた。しかし吉田にとって別にそれは珍らしいことではなかったし、無^{ぶしつけ}駄なことを聞く人間もあるものだとは思いつながら、その女の一心に吉田の顔を見つめるなごなく知性を欠いた顔附から、その言葉の次にまだ何か人生の大事事件でも飛び出すのではないかという気持もあつ

て、

「ええ、悪いことは悪いですが、何か……」

と云うと、その女はいきなりとめどもなく次のようなことを云い出すのだった。それはその病気は医者や薬では駄目なこと、やはり信心をしなければ到底助かるものではないこと、そして自分も配偶つれあいがあつたがとうとうその病気で死んでしまつて、その後自分も同じように悪かつたのであるが信心をはじめてそれでとうとう助かることが出来たこと、だからあなたも是非信心をして、その病気を癒せ——ということを縷々るるとして述べたてるので

あつた。その間吉田は自然その話よりも話をする女の顔の方に深い注意を向けないではいられなかつたのであるが、その女にはそういう吉田の顔が非常に難解に映るのかさまさまに吉田の気を測つてはしかも非常に執拗しつようにその話を続けるのであつた。そして吉田はその話が次のように變つて行つたとき成程これだなと思つたのであるが、その女は自分が天理教の教会を持つているということと、そこでいろんな話をしたり祈きとう祷とうをしたりするから是非やつて来てくれということ、帯の間から名刺とも云えない所在地をゴム版で刷つたみすぼらしい紙片を取

出しながら、吉田にすすめはじめたのだった。丁度そのとき一台の自動車が出来かかってブーブーと警笛を鳴らした。吉田は早くからそれに気がついていて、早くこの女もこの話を切り上げたらしいことと思って道傍みちばたへ寄りかけたのであるが、女は自動車の警笛などは全然注意には入らぬらしく、却って自分に注意の薄らいで来た吉田の顔色に躍起になりながらその話を続けるので、自動車はどうとう往来で立往生をしなければならなくなってしまう。吉田はその話相手に捕つかまっているのが自分なので体裁の悪さに途方に暮れながら、その女を促して道の

片脇へ寄せたのであったが、女はその間も他へ注意をそ
らさず、さっきの「教会へ是非来てくれ」という話を急
にまた、「自分は今からそこへ帰るのだから是非一緒に
来てくれ」という話に進めかかっていた。そして吉田が
自分に用事のあることを云ってそれを断わると、では吉
田の住んでいる町を何処だと訊きいて来るのだった。吉田
はそれに対して「大分南の方だ」と曖昧あいまいに云って、それ
を相手に教える意志のないことをその女にわからそうと
したのであるが、するとその女はすかさず「南の方の何
処、××町の方かそれとも○○町の方か」という風に退引のっぴ

のならぬように聞いて来るので、吉田は自分のところの町名、それからその何丁目というようなことまで、だんだんに云って行かなければならなくなった。吉田はそんな女にちつとも嘘を云う気持はなかった。そこで自分の住所を打ち明かして来たのだったが、

「ほ、その二丁目の？ 何番地？」

といよいよその最後まで同じ調子で追求して来たのを聞くと、吉田はにわかにくつと癩しやくにさわってしまった。

それは吉田が「そこまで云ってしまったてはまたどんな五月蠅うるさいことになるかもしれない」ということを急に自

覚したのにもよるが、それと同時にそこまで退引のならぬように追求して来る執拗な女の態度が急に重苦しい圧迫を吉田に感じさせたからだった。そして吉田はうっかりカツとなつてしまつて、

「もうそれ以上は云わん」

ときつと相手を睨んだのだった。女は急にあつけにとられた顔をしていたが、吉田が慌あわててまた色を収めるのを見ると、それでは是非近々教会へ来てくれと云つて、さつき吉田がやってきた市場の方へ歩いて行つた。吉田は、とにかく女の云うことはみな聞いたあとで温おとな和しく

断ってやろうと思っていた自分が、思わず知らず最後まで追いつめられて、急に慌あわててカッとなったのに自分ながら半分は可笑おかしさを感じないではいられなかったが、まだ日の光の新しい午前あけくの往来で、自分がいかにも病人らしい悪い顔貌あけくをして歩いているということを思い知らされた揚句あげく、あんな重苦しい目をしたかと思うと半分は腹立たしくなりながら、病室へ帰ると匆々そうそう、

「そんなに悪い顔色かなあ」

と、いきなり鏡を取り出して顔を見ながら寝台の上の母にその顛末てんまつを訴えたのだった。すると吉田の母親は、

「なんのお前ばかりかいな」

と云って自分も市営の公設市場へ行く道で何度もそんな目に会ったことを話したので、吉田はやつとその訳がわかって来はじめた。それはそんな教会が信者を作るのに躍起になっていて、毎朝そんな女が市場とか病院とか人のたくさん寄って行く場所の近くの道で網を張っていて、顔色の悪いような人物を物色しては吉田にやったのと同じような手段で何とかして教会へ引っ張て行こうとしているのだということだった。吉田はなあんだという気がしたと同時に自分等の思っているよりは遙かに現実

的なそして一生懸命な世の中というものを感じたのだった。

吉田は平常よく思い出すある統計の数字があつた。それは肺結核で死んだ人間の百分率で、その統計によると肺結核で死んだ人間百人についてそのうちの九十人以上は極貧者、上流階級の人間はそのうちの一人にはまだ足りないという統計であつた。勿論これは単に「肺結核によつて死んだ人間」の統計で肺結核に対する極貧者の死亡率や上流階級の者の死亡率というようなものを意味し

ていないので、また極貧者と云ったり上流階級と云ったりしているのも、それがどの位の程度までを指しているのかはわからないのであるが、しかしそれは吉田に次のようなことを想像せしめるには充分であった。

つまりそれは、今非常に多くの肺結核患者が死に急ぎつつある。そしてそのなかで人間の望み得る最も行き届いた手当をうけている人間は百人に一人もない位で、そのうちの九十何人かは殆ど薬らしい薬ものまずに死に急いでいるということであった。

吉田はこれまでこの統計からは単にそういうようなこ

とを抽象して、それを自分の経験したそういうことにはあてはめて考えていたのであるが、荒物屋の娘の死んだことを考え、また自分のこの何週間かの間うけた苦しみを考えると、漠然とまたこういうことを考えないではいられなかった。それはその統計のなかの九十何人という人間を考えてみれば、そのなかには女もあれば男もあり子供もあれば年寄もいるにちがいない。そして自分の不如意や病気の苦しみに力強く堪えてゆくことの出来る人間もあれば、そのいずれにも堪えることの出来ない人間も随分多いにちがいない。しかし病気というものは決し

て学校の行軍のように弱いそれに堪えることの出来ない人間をその行軍から除外してくれるものではなく、最後のゴールへ行くまではどんな豪傑いやおうでも弱虫でもみんな同列にならばして嫌いや応おうなしに引き摺ずってゆく——ということであつた。

——一九三二年十二月——

日本文学電子図書館

檸檬

著者：梶井基次郎

制作者：宮澤一郎

出版社：新潮文庫、新潮社

昭和44年8月20日 4刷



日本文学電子図書館